

Eureka X

六年制通信 No.26 令和4年11月18日(金)号

ブレイクスルー

どの教科でもそうでしょうが、いや、学校の勉強に限らず、何か一つの技術を身につけようとする場合でも、習ってもすぐには理解できない難しい領域があるものです。しかし、ずっと繰り返しているうちに、あるいはずっと考えているうちに、面白いもので、ある日まるでカーテンがさっと開いて光が差し込むように、突然パッとできるようになったり理解できたりする瞬間が訪れます。これをブレイクスルーと言います。辞書には「突破」とか「大躍進」とか書いてあると思います。君たちもこれまでに経験したかもしれませんね。私もあります。

時間と理解の関係をグラフにすると単純な右肩上がりにはならず、階段状になります。徐々に理解していくというよりは、ある程度わからない時間が続き、ある時突然パッと階段を一段上がるような感じです。その繰り返しです。小さなブレイクスルーを繰り返すこともあるでしょうし、長い時間をかけて非常に大きなブレイクスルーを経験することもあると思います。私は小さいものはもちろんですが、十年二十年の単位でわからない状態が続き、ある日急に理解できたという大きな経験をしたことがあります。この通信のタイトルのように、そういう時は「あっ、そうだったのか、わかった」と声に出ますね。ただ、この大きなブレイクスルーを経験するには二つの条件があると思います。一つは、当たり前ですが、考え続けることです。わからないことを捨てない、これは言うは易く行うは難しで、大変苦しいことですが、考えることを放棄してはいけません。いつ自分にブレイクスルーが訪れるかわからない、ひょっとしたら訪れないかもしれない、それにもかかわらず考え続けるのです。この粘り強さは絶対に必要です。常に頭の片隅で「理解できていない問題」を転がしておく、そんな感じですかね。二つ目は、ブレイクスルーはリラックスした状態のときに起きるということです。ですから、そういう時間を持つように心がけることです。アルキメデスが **Eureka!**と叫んだのはお風呂の中です。あのエピソードには浮力を体感する風呂が必要だったのかもしれませんが、私はやはりお風呂でリラックスしていたと思いたいな。ノーベル賞受賞者たちがアイデアを思いついたのも、ボーっとしているときが多いらしいし。

さて、私の知る限り、最も素晴らしいブレイクスルーの瞬間は映画『奇跡の人』(私は1962年版が好きです。ちなみに1979年版でサリバン先生を演じたのは1962年版でヘレン・ケラー役だった女優です)のラストシーン、あの井戸から流れる水に、初めて「水」という名前があることを理解した映像です。今思い出しても魂が震えそうです。『奇跡の人』の原題は the miracle worker で、奇跡を起こす人、つまりアニー・サリバン先生のこと

です。ヘレン・ケラーのことではありません。ちなみに62年版でサリバン役を演じたのはアン・バンクcroftです。ダスティン・ホフマンの『卒業』ではミセス・ロビンソンを、『エレファントマン』では主人公が女神のごとく崇める舞台女優をそれぞれ演じています。『奇跡の人』でアカデミー主演女優賞に輝いています。是非観て下さい。

さて、映画は井戸のシーンで終わっていますが、ヘレンが次々に言葉を覚えていくのはその後です。2歳にならないうちに視覚と聴覚を失い、従ってうまく発音もできない、そんな状態でサリバンに出会うのが7歳の時。私は不思議でならないのですが、物の名前を指文字で覚えていくのはいいとして、不規則な複数形とか動詞の過去や現在完了、さらに抽象名詞などをどうやって理解していったのでしょうかね、ヘレンは。例えば、chanceという文字を指で表現できても、それが「機会」のことだと理解するには、どれほどの時間が必要だったのでしょうか。サリバン先生も偉いけれどヘレンに才能があったことも間違いないでしょうね。ある事に対して、99の努力をしても1の才能がないために100にならない人もいれば、1の才能があるために99の努力をしなくても100と同じ内容にすることができる人もいる、それが才能というものですが、ヘレンには才能があった上に、膨大な孤独な時間があつたと推測されます。視覚聴覚を失ったが故に、外的な刺激の入らない孤独のことですが、それが深い理解力を育てたのだと私は想像しています。きっとヘレンもずっと考え続けていたのでしょうかね。

今週のおすすめ

・佐藤正午 『ありのすさび』 (岩波書店)

『月の満ち欠け』が大方の予想通り映画になりましたね。生まれ変わりを信じる私としては、さてどのような映像になるのか興味のあるところです。

今回紹介するのは(ひょっとして前にも紹介したかもしれませんが)佐藤さんのエッセイ集です。「すさび」は「遊び」のこと。「ありのすさび」は蟻ではなく、「在りのすさび」、つまり日常を描いたエッセイという意味です。著者がこの言葉を与謝野晶子の歌集で初めて知ったエピソードが本編にあります。

淡々と日常を描くにはよほど筆の力が必要だと思うのですが、この本は成功していますね。私のお気に入り、まず「国語辞典」とすぐ次の「続・国語辞典」です。朝起きてまず辞書を引く。夢の中に出てきた意味のあいまいな語を引くというのです。白状しますと私も時々しています。また、秋の味覚のニュースで「〇〇にしたつづみを打ちました」と締めくくられると、「したつづみ」ではなかったかと不安になってしまい、毎年引くそうです。「したつづみ」、また「したつづみ」とも言う、という項目を読んでホッとするわけですね。あるいは今でも意味の分からない言葉に出くわすことがある。「盗汗」がわからなくて辞書を引く。「寝汗」のことだと知る。私は小説家である限りずっと辞書が手放せないのではないかと、思って恐怖する。そんな内容ですが、毎日辞書にお世話になっている身としては、いちいちよくわかるのですが、私は辞書を引くのは好きですし、これからも楽しんで引くつもりです。

BGMは Lilian Harvey の *Das gibt's Nur Einmal* でした…。